

大陸（北支）

歩兵の小隊長、

中隊長として北支等に従軍

―歩兵第三十三連隊、歩兵第七十七連隊―

三重県 山崎 仁夫

軍隊履歴

昭和十（一九三五）年十二月一日

現役兵として歩兵第三十三連隊入隊

十二月十二日 満州派遣北滿警備に従事

昭和十一年三月十日 歩兵科幹部候補生に採用

六月五日 甲種幹部候補生に区分

七月四日 内地原隊帰着

七月十日 昭和六年、九年事変における功

により金三十五円を賜る

十一月三十日 現役満期除隊

昭和十二年九月一日 教育召集のため歩兵第七十八連

隊に入隊

十月一日 将校勤務終了、召集解除

昭和十三年三月三十一日 任 陸軍歩兵少尉

六月二十八日 臨時召集のため歩兵第七十

七連隊に入隊

十月十九日 野戦隊補充のため屯地発、北

支山西省にて第一大隊第一中

隊第一小隊長を命ぜられ戦闘

力構成に参加従軍

昭和十四年十二月一日 任 歩兵中尉

昭和十五年一月六日 北支出發

一月八日 原隊帰着

二月十日 満浦鎮（平安北道江界郡）警備

隊長を命ぜられる

四月二十九日 支那事変における功により

功五級金鷄勲章並勲六等單

光旭日章及金二千六百円を

賜る

八月二十五日 召集解除

昭和二十年三月三日 臨時召集のため久居第三十八部

隊に入隊、同日第一四七警備大

隊第一中隊長を命ぜられる

三月十八日 朝鮮警備のため屯地出發、京

畿道水原邑に駐屯

十月九日 終戦のため仁川出港

十月十五日 佐世保着、召集解除

一 満州事変

昭和十年十二月一日、私は久居の歩兵第三十三連隊に初年兵として入隊した。当時連隊は、満州警備のた

め北滿に駐屯していて、連隊の本部はチハルの東大營にあった。私達は、新しい軍服や、名前もいちどきには覚えることの出来ないほどの数々の装具を支給されて、隊伍を組んで歩くことと、敬礼の仕方だけを覚えてもらったという、はなはだ頼りない兵隊のまま満州へ渡ることになった。

神戸港から御用船で北朝鮮の雄基に上陸。零下三十度の雪の荒野だが、もうすつかりあきらめていて、どこへでも連れていけという感じ。しかも同じ境遇で、同じ気持ちの初年兵であるから、故国を出発した前後ほどの深刻感はない。

どこをどんなふうに通過したのか、また何日かかったのか今では全く記憶はないが、ようやくチハルに到着した。煉瓦建ての立派な二階建ての兵舎の前に整列して、連隊長の訓示がある。「よくやって来た。今後の活躍を期待しているぞ」というような話だったのだから、肩にくい込む重い背のうを幾度か上にずり上げながら、訓示の早く終わるのを待ちわびていたことぐらいしか記憶に残っていない。

軍隊経験のある人なら、誰でもご承知のことであるが、入営後一番鍛えられるのは、一期の検閲前の三ヵ月である。そして鍛えられるのは、野外で行われる訓練だけではない。内務実施と言つて、兵室内での起居動作全体が訓練の対象となる。しかも営外居住者の将校達がいなくなった朝晩と夜間に集中して行われる。

この時間は、伍長や新米の軍曹が中隊の殿様で、下士官室に君臨しており、内務班の兵室は、柄の悪い二年兵の天下である。新兵にとつて、一番待ち遠しい消灯ラッパが「兵隊さんは可哀想だなあー、また寝て泣くのかよー」と夜の兵営内に響き渡つて、皆寝台にもぐり込み、班内が一斉に暗くなると、彼等悪魔たちが行動を開始する。

「第一内務班の初年兵、起床！」初年兵は、飛び起きて襦袢袴下の寝ていたままの姿で、各自の寝台の前で不動の姿勢をとる。「山崎二等兵、貴様は銃の手入れを行ったか」「やりました」「ここへ来い。引鉄の用心金の裏に埃がついている」「手入れしました」「文句はいらん」パン、パン。両ほほのピンタが始まる。

「軍靴の裏に土がついている」「たんつぼの掃除が不十分だ」「今日の行軍で落伍した奴がいる」悪魔たちの目から見れば初年兵をしぼる種はいくらでもある。「今年の初年兵は、気合が抜けているぞ」「初年兵全員一列に整列。前列回れ右」「対抗演習始め」。対抗演習というのは、向かいあつた者同士が、相手のほほを交互に殴りあう懲罰動作である。営内での私的制裁は、正式には禁じられていたようだが、このようなことが毎晩繰り返されて、初年兵の動作もだんだんと機敏になる。

歩兵の初年兵教育は、戦闘のための基本動作である各個戦闘教練と、基本射撃、銃剣術で、その中でも初年兵が一番苦勞するのは銃剣術だ。基本動作は、正規の時間に教官が教えてくれるが、その後の練習は、朝夕、中隊宿舎前の広場で行われるいわゆる「寒稽古」が中心である。「初年兵、銃剣術に集合」と週番上等兵の声がかかると、初年兵は防具と木銃を持って舎前に整列、直ちに腕自慢の二年兵との稽古が始まる。キャリアが違い過ぎて、対等に仕合が出来るはずがな

い。足がもつれる。日に汗が入る。「しっかりかかってこい」力いっぱい突いていくと、軽く外して、木銃で地面に押し倒される。まるで大人と幼稚園児との相撲のようだ。

当時私は体重が五〇キロくらいで、腕も細くぶざまな姿であったが、その骨のような細い上膊部をさんざんに突き上げられ、揚げ句の果ては、左手を全然曲げることが出来なくなった。

陸軍病院で診断を受けると「化骨」しているという。軍医殿は「なかなか治らないと思うが、湿布でもしておけ」という。中隊の衛生兵は「一生治らないぞ、兵役免除だなあ」と更に悲観的だ。万歳の声に送られて勇躍征途にのぼったのに、銃剣術で二年兵に突かれて廃兵になったといって郷里に帰ることも出来ないう。腕の曲がったままで、演習も一切休まず頑張り通すことにした。

私達初年兵の教官は、日比野少尉と言って、陸軍士官学校を卒業したばかりの紅顔可憐の美青年であった。初年兵の私達は、内務班では二年兵に気を使って

ばかりいて緊張の連続であったが、この日比野少尉の初年兵教育は、一番楽しい時間であった。私達第六中隊の第一内務班の初年兵は大部分分校出で、幹部候補生の受験資格のある者が多かったので、彼は士官学校で自分が受けた教育と同じ要領で私達の人格を尊重しながら教育を実施していて、厳格ではあるが愛情のこもった訓練であった。

三カ月経つと、北満の凍りつくような風もだいぶん和らいてきた。地面はまだ深くまで凍ってはいるが、營外の柳のこずえをゆさぶる風も、あの肌を刺すような厳しさはない。討伐に出動していた二年兵も帰隊して営内も平常に戻り、一期の検閲が始まった。

今日は最終日で部隊戦闘教練だ。三カ月間の成果を連隊長にお見せするのである。見渡す限りの平原には所々に薄雪が白く残っていて、地面はまだコチコチの凍土である。遙か遠方に低い丘陵地が見えて、それが敵のトーチカ陣地であり、今日の私達の攻撃目標である。日比野少尉の「攻撃前進！」の透き通った号令が広野にこだまする。私達は立ち上がって走ることが許

されない。全員匍匐前進だ。地面に腹ばいになって、銃を水平に前面で支えたまま前方ににじり寄る、いわゆる尺取虫式の匍匐前進だ。

一〇〇メートル、二〇〇メートル、銃を支えて前後に動かしている両手が疲れてくる。腹の皮が痛くなる。一休みしたいが隣の二年兵より遅れるので一息つくわけにもいかない。五〇〇メートル、七〇〇メートル、凍った土の上であるが、寒さや冷たさなんかは一切感じない。汗が流れて目に入る。手でこすると顔がじりじりする。

一〇〇〇メートル、一二〇〇メートル、もう自分の身体か、誰の身体か分からなくなって気が遠くなってきた時、日比野少尉の突撃の号令だ。「突撃に進め」「突っ込め」。私達は一斉に立ち上がって煙幕の中を敵のトーチカに突入した。「状況、終わり」。トーチカの攻撃の演習は、これで終了した。連隊長の講評は「諸子の攻撃前進は、よく忍苦に耐え、かつ勇猛果敢、立派であった。これでソ連のトーチカ陣地に対する攻撃にも自信を得たものと思う」と、日比野少尉以下一

同、連隊長の激賞にあずかったのである。

しかし、私はそれ以上に嬉しいことに気がついた。それは「化骨」していたはずの私の腕が、匍匐前進の間に、いつの間にか軟らかくなって完全に治っていたのだ。「教官殿、自分の腕が治りました。完全に動きます。見てください」「山崎二等兵、よかったなあ」日比野少尉は、私の左腕をカーキ色の将校用の手袋のまま、優しくさすって、共に心から喜んでくれたのであった。

赤い夕日が広野の果てに静かに沈みかけたころ、私達は元気に軍歌を歌いながらトーチカ陣地を後にして兵舎に向かった。(教官の日比野少尉は、支那事変の当初、中隊長として奮戦し、戦死された)

二 支那事変

昭和十二年七月、日支事変が勃発すると同時に平壤に駐屯していた歩兵第七十七連隊は急ぎよ北支に出動して、南范、郎坊の緒戦から連戦連勝、一挙に石家荘まで進出した。山西省の入り口の難関である娘子関では、戦死五〇〇人という大損害を出したが、昭和十三

午の正月は山西省の首都太原の周辺で過ごし、続いて臨汾、聞喜、運城と同蒲線に沿って山西省を南下、激戦に次ぐ激戦を重ねて、八月の末、ようやく山西省西南端の要衝風陵渡の高地を占領した。私の属する第一大隊は、高地占領後、この敵前の第一線に残って、それから約十カ月にわたる黄河を挟んだ長い対陣生活に入った。

私が補充で第一線に到着したのは昭和十三年十一月初めで、我が第一中隊は風陵高地の東方四〇〇メートルにある西王村という黄河北岸の寒村の警備に就いていた。

黄河の対岸の潼関からは、夜となく昼となく大きな大砲で砲撃してくるので、風陵高地の大隊本部と第二中隊は穴蔵生活をしていた。我が中隊は現地住民の家を借用して、分隊ごとに宿舎に入っていた。部落の入り口には地下陣地を備えた下土哨があつて、第一小隊は、西門と北門に三個所の下土哨を出していた。私達は翌年三月に東王村に移駐するまで、この地に住みつくことになった。

昭和十三年十一月二十七日午前二時二十分、第二下土哨の前面に約一個小隊の敵が夜襲して来た。これは、私が戦地へ来て初めての敵との遭遇で、しかも到着してからまだ二十日足らずであつたので覚悟はしていたが度肝を抜かれた。やっと寝付いた真夜中、枕元での敵の銃声で飛び起きたが、脚がガタガタして靴が履けない。やっとのことで革脚絆を着け軍刀を引っさげて外に出ると、いつの間になってきたのか、小隊の兵隊全員が武装して舎前に整列し小隊長の私の指示を待っている。

当番の伊藤上等兵を頼りに暗闇の中を行ったり来たりしていると、中隊長の鬼木大尉が傍らにやって来て、擲弾筒に射撃の方向と距離を示し榴弾の射撃を命じた。実に慣れたものである。前方の隙地の方で山砲が破裂したような音がして、急に敵の射撃が止み静かになる。私も気を取り直して第二下土哨の方に向かった。

このような夜襲は、これ以後何度もあつて新米の小隊長もだんだんと慣れてきて一人前なるのだが、この

夜の最初の敵の夜襲には全く度肝を抜かれて、お恥ずかしいものであった。

三 大東亜戦争

敗戦の時、私は京城（ソウル市）の郊外にある水原高等農林学校の中に第一四七警備大隊第一中隊の本部を置いていた。八月十五日、天皇陛下の終戦の放送を拝聴した私は中隊の全員を本部前の広場に集め、次のような訓示を行った。「ただ今、恐れ多くも、大元帥陛下の御言葉をラジオで拝聴した。我々の日夜の奮闘にもかかわらず、わが国は本日、米英に対して無条件降伏を行った。間もなく、米國やソ連の兵が当地にも進入してくるだろう。また祖国日本の本土も彼等の蹂躪に伏すことと思う。各地でどんな悲劇が展開されるかもしれない。しかし、我々最後まで生き残った者は、この大きな試練に耐えなければならない。昔から『国破れて山河あり』という。我々の郷里の山河は、どんなに焼けただれ荒れ果てているかもしれないが残っているはずだ。我々はこの残された山河と留守を守り抜いた家族を守らなければならないのだ。占領下

の屈辱ははかり知れないと思うが、どんな屈辱であってもこれを耐え忍び、十年でも、二十年でも辛抱しようではないか。そして、ただ今のこの無念を我々の子供や、孫達に伝えようではないか。どうか自棄を起さず、体に気をつけて、全員うち揃って郷里に帰り着くまで自重してもらいたい」と。

わが中隊の将兵は三重県における最後の召集であったため、適齢期の青年はすでに出征しておらず、小学校の校長先生や教頭等の短期現役兵出身の相当地位のある年配者が多かったが、方々ですすり泣きが聞こえて、互いに祖国の再起を誓いあったのであった。

隣接して航空隊があった。水原特攻基地である。この将校から「わが方には、飛行機も爆弾も十分ある。このまま引つ込むわけにはまいらない。後に続く者を信じて戦死した戦友や部下に申し訳がないから、米軍が接近してきたら敵艦に突つ込むことにした。警備隊は飛行場の確保をたのむ」との連絡がある。翌日には「将校全員飛行場で腹を切ることにした。一緒にどうか」という誘いである。そもそも我々の第一四七

警備大隊は、大陸と日本本土との間の兵員の輸送が緊要になってきた昭和二十年三月、三重県の久居の連隊で編成された。朝鮮半島に渡った大隊は、本部を天安に置いて京城から大田までの京釜線の警備を担当したが、わが第一中隊は最北端の京城と烏山間の警備を分担することになっていた。

敗戦の詔勅で中隊の将兵も一時は動揺した。しかし、「もうこれで戦争も終わって、日本に帰れる」という安堵感もあって平静を取り戻し、従来からの任務である鉄道警備に従事することになった。そして二日目、突然、在留日本人が鉄道から少し奥に入ったところで、暴徒に襲われるという情報が入った。鉄道警備が私に与えられた本務であるが、そのまま放置する訳にはいかない。暴動があった龍仁、利川というところ、畿道内では、郡役所もあるちょっと大きい町で、日本人も相当住んでおり、朝鮮総監督府の技手時代に公共事業の竣工検査に出張した記憶がある。

敗戦で命令系統が全く乱れてしまっていて、何の指示もなかったが、私は独断でトラックに重機関銃を一丁積

み込んで、第三小隊長の指揮する二個分隊を直接指揮し龍仁に向かった。

龍仁の警察署は完全に共産系らしき暴徒に占領されていて、署長以下の日本人は武装解除され、武道場に監禁されている。暴動の主犯格である二十歳ぐらいの若い鮮人の臨時署長が握手を求めてきたが、叱りたおして道場の鍵を開けさせ一同を無事救出することが出来た。しかし、警察がこんな状態では町内はどんなことになっているかしかない。早速街の要所要所に歩哨を配置し、巡察を出して警備を固め、警察署の前の十字路に住民の集合を命じた。

トラックの上に立ち上がった私は、集まった数百人の大衆に向かって街頭演説を始めた。「私は水原警備隊の山崎中尉だ。一昨日、わが日本は米英に対して無条件降伏を行った。間もなく内地人は日本に引き揚げ、君達は待望の独立を勝ち取るだろう。我々日本民族とは昔からいろいろと接触があった。長い間には、うまくいっていた時もあっただろうし、また、まずかった時もあったと思う。しかしわれわれは同じ肌の

色の、同じ顔形の隣組の東洋人同士だ。他の国の人たちはよりは血族的に親密なはずの間柄だ。今後二つの別々の国に分かれても仲良くやろうではないか。私は心から朝鮮民族の今後の発展と幸福を祈っている」と。

この夜は当地に宿泊して様子を見守ることにした。夕食後、面会人があるというので部屋に招じ入れてみると、京城農業学校の教員時代の教え子の魚台愚君である。「先生の街頭演説を聞いて懐かしくてやって参りました」という。土地の名物の「成勸まくわ」をたくさん持参し、皆に食べてもらいたいとのことだ。久しぶりで話が尽きないが、「あまり長居をすると共産党に睨まれるぞ」と注意して別れた。

私は龍仁の町の平靜に立ち直ったのを確認した後、下士官の一個分隊の駐留を命じて、次の郡役所の利用に向かった。

十月に入って、朝晩の寒さがそろそろ身にしみるようになった頃、米軍と平穩裏に警備の交替をし、日本

に引き揚げることになった。

後日談になるが、昭和五十三年夏、韓国の首都ソウルの新国際ホテルのロビーで「先生、お元気ですか。魚台愚です」「おお魚台愚君。久しぶり、御出世で」「お手紙も差し上げず、失礼していました」「龍仁で別れてから三十三年ぶりだね」と、その夜は彼の同級生が中心になって私の歓迎会が行われた。

このクラスは、京城農業学校で私が四年と五年の時担任教師であったかわいいい教え子だ。解散後、このまま別れるのは心残りだと言って私のホテルまで送ってくれた彼に、「だいぶ苦労したことだろうが、龍仁で別れてから後どうでした」と尋ねると、彼はあの当時のことを思い出しながら、「終戦直後、龍仁の街頭で先生をお見かけしてから、是非ともお会いしたくなつて宿舎に参りました。最初は入り口にいた上等兵に断られました。下士官が出てきて恩師ならばと面会を許してくれました。先生たちの軍隊が引き揚げてから米軍が進駐してきましたが、あんな田舎には、たまに

巡察に出てくる程度でなかなか治安が良くなりません。私は町役場の総務課長をしていたので、自警団を作ったりして治安の回復を図りました。

私は韓国独立後の自分の進む方向をいろいろ考えましたが、先生の金鵝勲章を帯びさっそうとした青年将校の姿が目から離れませんでしたので、軍人になろうと決心しました。それから猛勉強を始めて、士官学校に入学したのです。中隊長時代に認められて参謀本部付になりました。南北戦争の時は豆満江の沿線で戦闘に参加しましたが、また本部に帰り陸軍大学を卒業しました。連隊長をしばらく務めて准将に昇進し、今年ようやく予備役に編入されました」と、淡々と過ぎし日の苦勞の跡を話してくれた。